名古屋女子大学　紀要　**44**（人・社）　293～306　1998

グロテスクの諸相

―― *Winesburg, Ohio* の世界（その２）――

伊藤太郎

Various Aspects of the Grotesque in Winesburg, Ohio

Taro ITO

はじめに

筆者は、英米文学の短編作品に登場する個性的で特徴的な主人公たちを取り上げ、彼らの綿密な心理学的な観点からの性格分析や人物研究を通して、背景となるその時代や社会の価値観や精神風土といった〈時代性〉を、逆に探り出すという研究方法に大きな関心がある。今回も前稿に引き続いて、シャーウッド・アンダソン（Sherwood Anderson, 1876-1941）の代表作の *Winesburg, Ohio*『オハイオ州ワインズバーグ』（1919年）を取り上げて、この連作短編集の中で孤独に蠢いている、実に多彩で興味深い、異様な人物たちに焦点を当てたい。(1) 中には、病的な歪みを被ってグロテスクな姿を呈する人物も多く、心理学的な症例研究には格好の素材を提供している。彼らの抑圧された孤独な内面世界の理解に努め、声なき叫びに耳を傾け、その歪みのある性格傾向や病理性を分析し把握することによって、19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカ社会の時代の、ある意味での病理性を担うグロテスクな群像の正体に迫ってみたいと思う。

前稿では、この連作短編集に登場する４人の女主人公たちを取り上げ、内面の葛藤や苦悩を探りながら、彼女たちの置かれた孤独な疎外状況を考察した。(2) 男性優位の伝統的価値観に彼女たち自身が縛られているところは多分にあるのだが、家父長制未だ厳しき父権社会、因習的な農村部の閉鎖社会、或いは人間性の喪失を強いる産業化社会といった諸相の中で、社会的発言権も持たされず、忍従・屈従の生活を強いられるか弱き女性たちの実態を検証した。この時代のアメリカ社会は、女性たちの自立や尊厳維持が困難な状況であったことは当然だが、さらに、心と心の触れ合いを求める親愛欲求や融和志向の女性的な生命原理までもが封印され、外界との生命交歓を絶たれた彼女たちは、もはや生き生きとした健全な生命感情を喪失し、不安や絶望の暗黒の淵に落ちるしかなかったのだ。

そうした女性たちと同様、この短編集に登場する多くの男性たちも、一様に、地滑り的に激変する時代性の大渦の中で翻弄され、あるいは等しく周囲の世界から疎外され、生命感情を率直に表出できないで、鬱々とした孤独の殻の中に内向している。心の壁を取り、我執を解いて、お互いに心の交流を計れば良いものを、それができない不幸な状況なのだ。ある者は生来の性格的な欠陥のために他我との融和を恐れ、ある者は人生の挫折体験で深刻な人間不信に陥り、またある者は謎めいた罪悪感に苛まれて人間社会への嫌悪感を露にする。しかし中には、グロテスクな歪みは見せながらも、何とか人間関係を維持できる者もいた。本稿では、そうした男

性の主人公像の中から特に特徴的な5人を選んで、彼らの心理の内面を探り、人生の軌跡を辿り、彼らのグロテスクな仮面の下に隠された素顔を検証・考察したい。なお扱う作品と主人公は次の通り。

1．*Loneliness*『孤独』のイーノック・ロビンソン（Enoch Robinson）
2．*Respectability*『品位』のウォッシュ・ウィリアムズ（Wash Williams）
3．*The Philosopher*『哲学者』のパーシヴァル医師（Doctor Parcival）
4．*A Man of Ideas*『着想家』のジョウ・ウェリング（Joe Welling）
5．*An Awakening*『ある自覚』、*Nobody Knows*『誰も知らない』、及び *The Thinker*『内省的な少年』に登場するジョージ・ウィラード（George Willard）、および彼を取り巻く2、3の人物たち

1

1980年代から20世紀初頭にかけてのアメリカは、ゆったりとしたライフスタイルの農本的、手工業的社会から、大量生産・大量消費を旨とする大工業化社会に激変する時代の転換期であるから、あらゆる意味での都市化の洗礼の波が地方の小都市や農村部にまで及び、当然人々は新時代にふさわしい価値観や思考法、生活様式を身につけることを余儀なくされていた。質素倹約の伝統的なピューリタニズムの呪縛が解け、解放気分が蔓延し、機会均等の期待感が広がるまではよかったのだが、次第に消費的、物質享楽的な風潮が時代を被い、夢見る若者たちは次々と急かされるように故郷を離れ、アメリカ的成功を求めて大都会に冒険の旅に出かけた。しかし、大都会はそういう無数の若者を待ち受け、呑み込んで消化し、そして無残にも排泄した。現実世界の荒波（人間関係も含めて）は容赦なく若者の性格的弱点を窺い、そして急所を突いた。失意の挫折体験は、救い難く若者を自信喪失の抑鬱状態へと陥れ、窒息するような孤独の淵に追いやったのだ。

Loneliness『孤独』のイーノック・ロビンソン（Enoch Robinson）は、元来が無口で大人しい方だったが、決して心を閉ざしていた訳ではなく、道で人に会うと愛想の笑みを浮かべて会釈する少年だった。孤独癖があると言うよりも、他人欲求が乏しく自分から人に近づくことはなかった。無類の本好きで、高校時代には本を読みながら道を歩いていて、危うく馬車に轢かれそうになったこともあった。21歳のとき画家になる志をたて、親元を離れ単身ニューヨークに上京して美術学校に入った。田舎出身の無口なイーノック青年にも、最初は若い画家の友達が沢山できた。彼らは彼の下宿にも押し掛けて来て、熱っぽく芸術論を論じ合った。しかし、煙草をふかしながら喋りまくり、借り物の立派な芸術論を振りかざす彼らを前に、彼はただただ圧倒され、「青くて大きな子供っぽい目」であたりを茫然と見渡しながら、片隅に引っ込んで黙り込むしかなかった。彼らは都会によく見受けられるような、洗練された、知識先行型の、「芸術を論じることが、実質以上の意義のあること」と信じて疑わない連中だった。イーノックも喋りたかったが、どのように表現すればいいのか判らなかった。無理をして議論に加わろうとしても、興奮の余り唾をとばしたり吃ったりで、異様なキーキー声しか出せなかった。困惑が焦燥へと変わった。

自分の自信作の絵を勝手に解釈し批評する彼らに腹立たしさと屈辱感を覚え、また、肝心な処を説明したくてもできない自分に対しても、もどかしさと苛立ちを募らせるに至って、イーノックは次第に仲間を下宿に招くのを止めてしまった。競争意欲を隠さず、言葉巧みに自己主

張のできる、社交術に長けた都会の若者に変身する試みは失敗に終わった。交通事故で跛(びっこ)を引くようになった肉体的コンプレックスも、積極性を失わせ自信喪失を招いて、対人関係回避の傾向に拍車をかけたらしい。田舎出身のコンプレックスが解消できないまま、洗練された都会の文化摩擦の洗礼をまともに受けて、だんだんと萎縮し寡黙になり、対人回避的な抑鬱状態に陥る、そして、それが深刻な失恋体験と並んで、しばしば若者たちにとっての精神病発症のきっかけになることはよく知られている。イーノックの場合は、元来が子供っぽくて気弱な性格（彼のキーワードは child-mind）だった訳だが、この対人関係の挫折が決定的な人生の転換を招く結果となってしまった。彼は自室に鍵をかけ、現実からの完全逃避を計った。空想上の仲間をでっち上げ、その中では自分が「王様」でいられる秘密の花園を作り上げた。その空想世界では、彼は自信に満ち溢れ、大胆に振舞えたし、好きなように長演説ができ、締めくくりの最終意見を述べることも出来た。精神分裂病的な被害妄想ではなかったが、多分に彼の自我の未熟性を窺わせる、劣等感解消のための逃避型の代償行為の意味合いが強かった。

そんな彼も人並みに性愛衝動が湧いて手近にいた同級生と結婚し、今一度、現実社会との関わりを計ったが、家庭生活の破局は避けられなかった。イーノックの結婚願望が、切なる他人欲求と新家庭創造の意欲と気概に基づいたものではなかったからだ。妻子と一緒にアパートにいると、壁の中に閉じ込められて「息が詰まる感じ」がした。秘密の部屋を借りて、一人で夜の町を徘徊するようになった。母親の死で得た遺産を妻に与え、一方的に離別を宣言。「少し気が狂っている」夫を恐れていた妻は、最初は抵抗をしたが、結局は離婚を承諾した。以後、彼は「幸せな子供」のように幼児的万能感に浸りつつ、自分の空想が生み出した20名以上の連中と滑稽な威張りかえった態度で声高に喋ったり、指図したり、人生を論じたりしながら、一緒に暮らすことになった。

そもそもこの現実世界では、イーノックにあっては「なに一つうまくいった例がなかった。」美的な感覚、繊細な感性には優れたものがあったが、いつまでたっても自己本位の身勝手さから脱却できず、性格的な未熟さや幼稚さが生来の空想癖や意志薄弱さと相俟って、世間的な意味での一人前の大人にはついになれずじまいだった。「金銭や性や世評」などの渦巻く現実世界では、結局生きていけない不適応者の烙印を免れら得なかった。英雄気分を満喫するために空想の人間関係の中に埋没し、自分の幼稚な欲求のために簡単に妻子を捨てる。親に愛された経験がなかったからか、と勘ぐりたくなるような情愛の欠落だ。この連作短編集には親子関係や夫婦関係の破綻の物語が多いことを考えると、あながち見当外れでもなさそうだ。父親不在の生育環境（父親への言及が皆無）が、即、適切な父親モデルの不在に結びつき、それが逞しい男性としての忍耐力、責任感、現実受容性などの欠落を招いているらしい。

しかし、ある女性に関係した事件が起こって、イーノックの15年間のニューヨーク暮らしも終わりを告げることになる。その事件で彼はニューヨークを逃げ出さねばならなくなったのだ。誰一人彼の部屋に来なくなってから何年か経ったとき、一人の女（同じアパートの住人で、ヴァイオリン弾きらしかった）と親しくなる。寡黙で、座っているだけで何も話そうとしない女だった。なぜか、彼女は「彼の部屋には大きすぎる存在」に思えて、部屋に入れるのが（自分の中に入ってこられるのが）恐ろしい感じもして、ドアを開ける時にいつも迷った。でも、成熟した、その一人前の女に対する性的征服欲を押さえきれずに、一切合切を打ち明け、自分を曝け出し、その部屋の中では如何に自分が重要な人物か、偉い存在であるかを悟らせようとした。彼女が去ろうとしたので、ドアに鍵をかけ、後を追いかけ廻した。喋りに喋っているうちに、突然全てが微塵に砕け散った。彼の実体を理解した女の顔に軽蔑と哀れみの表情が浮かんだ。

彼は我を忘れて彼女を罵り、金切り声を上げて床を踏みならした。思い通りにならないので駄駄をこねるパニックに落ちた子供同然だった。「理解してもらいたいと思うと同時に、理解されるのが耐えられなかった」と彼自身が告白する。全てを知り尽くされると、自分という人間は底に沈み、溺れ死んでしまうに違いないという恐怖を覚えた。

自我構造の強固なはずのアメリカ人には稀なケースではないのかと率直な驚きさえ禁じ得ないが、そもそも自我皮膜の脆弱な人（精神病質者）の場合、他我との融合は、即、自我の消滅・崩壊の恐怖に繋がるらしい。未熟な自我皮膜が、堅牢な自我防御の機能を果たさず、脆弱な余り、人間関係の摩擦ですぐに他我の侵食を被ってしまうという被害意識が高じる。一人の生身の女性を愛するということは、自我皮膜の殻を脱ぎ、本来の内的自己を曝け出し、相手を受容し、また相手に己を託すということであり、それは互いの傷付け合いや摩擦を覚悟しての行為である。子どものように未熟なイーノックは、今回初めて勇気を出して、外的自我の皮膜を取り去って内的自我を曝したわけだが、如何せん、その内的自我そのものが脆弱すぎた。人間関係の摩擦や葛藤を恐れ、失敗や屈辱への直面を回避し、家庭人としての責任を放棄し、傷つくことを極度に恐れてきた長年の付けが、今にして回ってきたのだ。そして故郷に逃げ帰った彼は、夕暮れ時に田舎町の道をひょこりひょこり歩き回る、相手を見つけては泣き言をまくしたてる「得体の知れない、ぎくしゃくとした老人」となって今に至っている。

2

人々が欲望に目覚めたこの時代にあって成功者になるためのキーワードは、まさに「軽薄」、「無責任」、「自分勝手」、そして「世俗的」だった。そんな価値観や人生観の急激な変化を伴う時代には、人間らしさの欠落や人間関係の危うさが、直接的に夫婦間や親子間の愛情関係の危機に直結してくるのは当然だった。確かに農村部にはゆったりとした時間の流れ、素朴な人間関係、美しい自然や生命が文明に冒されずに残っているはずなのだが、残念ながら、このワインズバーグという町に限って言うと、そういう農村部の良さは消滅しつつあった。逆に、農村特有の因襲や閉鎖性、保守性が強調されていて、愛情や人間的共感を求めるか弱き人々がそうした因襲などに縛られて癒し難い孤独に喘いだり、或いは真の人間同士の絆が築けずに絶望の淵に落ちていた。次に取り上げる人物は、運命の神の悪戯を被りやすい若干の性格的欠点があるにはあったのだが、元来は純潔志向の強い、情愛に溢れた若者だった。彼は、ある意味で〈時代の申し子〉とも言うべき妻の裏切りに会い、一転して、自分の運命を呪い、世を儚み、徹底した人間嫌いになってしまう悲劇の主人公だった。現実の忌まわしき試練に躓き、絶望の孤独者となった人物のグロテスクさを身を持って演じた。

Respectability『品位』に登場するウォッシュ・ウィリアムズ（Wash Williams）は、女性に対する癒しがたい憎しみと嫌悪感の虜となっている存在であった。彼は新ウィラード館に下宿する老電信技師であるが、外界に心を閉ざし、自ら人間関係の絆を断って、孤独の暗黒空間の中で暮らしていた。若い頃は州内一の腕前との評判をとった男で、今でも町の男たちは敬意を払っていたが、彼の方では町の連中に対する敵意も露で、付き合うつもりなどは毛頭なかった。ただ一人彼が心を開き、友情らしきものを感じていたジョージ青年には、自分の忌まわしき過去の出来事を告白して、女性が如何に醜悪極まる存在であるのか、如何に信用できない汚らわしい存在であるのかを説いた。ジョージに安易な結婚を戒め、自分の二の舞を踏まないように忠告した。

神を恨み、自分の人生を呪い、人間社会に絶望して止まないウォッシュだが、特に女性に対する強い怨念が、彼の心を著しく歪め、醜い外観をいっそう醜いものにしたらしい。何しろ彼は町一番の醜男だった。首が細く、胴回りがむやみに太く、脚は貧弱そのもので、遠くから一見すると、猿のような不格好さだった。しかも全身不潔で、悪臭を漂わせていた。ぞっとするような意地の悪そうな顔ではあったが、しかし、この醜怪な男の目に燃える光は、人を怯えさせると同時に、惹きつけて好奇心を抱かせずにはおかないものがあった。真実を語る凄味のある声には、ほとんど美しいと思える何かが含まれていた。外面のグロテスクな醜貌に反比例するような内面的純粋さが予感された。絶望の淵に堕ちてこの浮き世を捨て、自分の人生からも降りてしまった者にしか判らない、悟りにも近い何か究極の真理を摑んでいるに違いない、そんな期待感をジョージは持った。

実は、そんなウォッシュにも結婚（そして離婚）という忌まわしき体験があった。背の高いすらりとした身体つきの、青い瞳の、ブロンド髪の美女と知り合って、気も狂わんほどの、一世一代の恋慕の情を燃やしたのである。醜男の彼には望むべくもない相手だったが、彼の燃える思いが通じたのか、その歯科医の娘と結婚できた。童貞を守って迎えた新婚生活は、夢のような幸せの絶頂期だった。ミミズを恐がる初々しい新妻と二人で行なう裏庭での野菜園作り。種を蒔く彼女の足元に這いつくばり、くるぶしに接吻。ぞくぞくと疼く情欲を抑え、至福感に目眩を覚えながら、触れば壊れてしまいそうな、純真無垢でか弱い彼女を、大切に守っていこうという決意を新たにした。

だが、天女のようにウォッシュが勝手に理想化した新妻は、彼の留守中に３人の情夫をそれぞれ日を決めて家に招き入れていた淫婦であることが２年後に発覚した。純情可憐さを装ったとんでもない食わせ物だった。全身全霊を捧げて愛したつもりだっただけに、見事に裏切られていた幻滅と失望は大きかった。そして、妻の浮気に気付かなかった後悔と自己嫌悪感。女性を理想化しがちな、単純思考の初な男だったからこそ、嫉妬心や恨みの気持ちを通り過ぎて、落差激しく極端に振れて、一気に女性に対する激しい敵意と憎悪の塊になってしまった。心を閉ざし、絶望的な人間不信におちた。妻に浮気の理由も聞かず、手にもかけず、親元に送り返した。銀行に貯金していた400ドルとまもなく処分した家の売却金もくれて遣った。屈辱を味わされた純情男の、精一杯の男らしい反抗だった。人生を彼女に賭けていた彼にとって、金など何の意味もなさないという意思表示をした、自暴自棄的な人生放棄だった。或いは２年という短い間だったが、夢のような心ときめく新婚生活の伴侶となってくれたことへの感謝の気持ちもあったろう。

心底愛した彼女への未練が断ち難かったので、母親に呼ばれて彼女の実家に行った時は、彼女が改悛の素振りを見せれば、ひょっとして縒を戻せるかも知れないという微かな期待もあった。しかしそれは、愚直で一途なウォッシュの、男としての情欲本能に訴えて夫婦の縁を戻させようとする母親の忌まわしき企みで、一糸纏わぬ裸の彼女が彼を出迎えた。破廉恥な行為を平気でさせる救いようのない母親、その母親とぐるになって自分を貶め堕落させようとする娘。純粋な心まで侮辱され、見くびられた思いで、二重の烈しい幻滅と憤りに身が震えた。女を抱かせてセックスをさせれば男は言いなりになると考える、女たちのその浅ましさや狡さは許せなかった。女性信奉者だった彼だからこそ、耐え難い屈辱体験以外の何物でもなかった。彼の怒りの刃が鉄槌として利いたのか、彼女は一ヶ月後、早々に病死した。

純情な醜男と多情な美女の出会いはとかく悲劇に終わるものだが、とにかく、ウォッシュは熱烈すぎる、盲目的な片思い状態で結婚することの悲劇を身を持って演じた。ただ問題として、

彼の方が結婚前から彼女の人間的本質をちゃんと観察していたのかという疑問が残る。冷静沈着に現実直視をせず、すぐに初な恋心で舞い上がってしまう純情型の単純人間だったのでは、という疑問だ。結婚後、次第に彼女が性愛面での欲求不満を募らせ、いつしか豹変して浮気に走ったのだったら、彼女にそうさせた責任の一端は夫にあるのではないか。否、元々が淫乱多情の彼女であったのなら、その正体を見抜けなかった彼にこそ責任があるのではないか。表面的なきれい事で済ます日々の生活も、純潔志向のウオッシュだからこそ十分に予想された。家庭にしまった宝物を指も触れないで大切に守るような生活、悪く言えば男に都合のよい飼い殺しは、彼の方はそれで良かったかも知れぬが、女の情欲を正当に発露させない、単調退屈極まりないものだったに違いない。

彼には人間存在が生まれながらにして持つ美と醜の二面性にたいする認識が欠落していたと言わざるを得ない。極端な理想化から、救いがたい嫌悪感や憎しみへと向かうその後の振り子の振れの大きさも、人間存在が宿命として抱える清と濁、明と暗、内と外の避けがたい混在状況を、ウォッシュが未だなおしっかりと認識し受容してはいないことを証明している。認めがたい現実をありのままに受容することが、人間としての成長を促し、心の癒しにも繋がるのだ。その意味では、現実の醜さの衝撃が大きすぎたために、彼の心が未熟なまま、呆然として立ちすくむ退行現象を引き起こしてしまったと言える。

彼女が天真爛漫な淫婦だったとしたら、男たちにとってこれほど魅力的な存在はなかったはずだ。否、疑うことを知らない純潔さと優しさの故に、男たちの誘惑を断わりきれずに泥道に足を突っ込んだというのが真相かも知れない。罪意識のない、呆れる程の大胆不敵さが何よりそれを物語る。或いは、性解放の気運に満ちた、狂騒狂乱のジャズ・エイジが間近に迫っていたことも考慮せねばならないだろう。妻が浮気にいそしみ、夫が悲嘆の涙を流すという、図式逆転のおかしさは、まさに一世を風靡したフラッパーの時代ならばこそだ。一方で、ピューリタニズムの呪縛から逃げられない『冒険』のアリス・ハインドマンのような悲劇の女性がいる反面、結婚という既成の枠に収まりきれない飛んでいる女性がどの時代にもいるのだ。但し、熱病に罹って死んだ彼の妻は、時期尚早、飛べそうで飛べなかった、失速して墜落したイカロスではあったが。

3

資本主義的な産業化社会、それに伴う消費社会の到来は、人間の様々な欲望（例えば、出世欲、金銭欲、物欲など）に火を付けて、人間から落ち着きとか余裕、あるいは自信を奪って、劣等コンプレックスの塊、強迫観念や被害妄想の虜、病的に心を歪めた醜悪な人間たちを生み出す結果になった。このような時代にあっては、男たちは夢を追い、金儲けに奔走する余り、思うがまま家庭や故郷を捨て、帰属意識を欠落した根無し草のようにさまようことにもなる。ゆったりと腰を落ち着けて地域社会に定住して、家庭を守り家族を養おうとする意欲は自然消失した。延いては、それが父親不在の家庭悲劇を招き、金にまつわる怨念を次世代の子どもたちに植え付けることになった。父親モデルの不在は、病的な性格の歪み、或いは神経症的不安や重篤な精神病の種を子どもに植え付けることにもなり得た。グロテクスの様相のひとつは、正体の摑みどころがない了解不能性だが、それは地域社会に帰属感が持てない放浪者（異郷の人）のストレンジャー性に直結する要素だった。長年この町に住みながら馴染めず、疎外感に苛まれて、闇に蠢く不気味な姿の孤独者たちは、勿論、ストレンジャー性を免れ得ない周縁人

そのものだった。

The Philosopher『哲学者』に登場しているパシーヴァル医師（Doctor Parcival）は、食事や服装、住まいなどの世事には全く頓着しない、太った不潔そうな、変わり者の孤独な医者だった。この町に来て5年、一応開業医の看板を掲げてはいたが、彼が寝泊まりする汚い診察室に患者はほとんどなく、来ても診察代も払えない貧乏人ばかりだった。話し相手は唯一人ジョージ青年だけで、好意を抱くその若者が編集室で一人になるのを診察室の窓から見届けてから、彼は決まって毎晩やって来るのだった。暮らしには困らない十分な蓄えがあって、本を書くためにこの町に来たとジョージには説明したが、また一方では、医者殺しをして大金を盗んだ強盗団の話をして、自分もその強盗の一味かも知れない可能性も自ら示唆して煙に巻いた。いま生活に困らないのは、その時奪った大金のおかげかも知れないと、思わせぶりに、謎かけをするように、自分の過去をジョージに語って聞かせるのが彼の気晴らしでもあった。

パーシヴァルの醸し出すグロテスクさは、偏に彼の正体不明性に起因した。彼も、記述のウォッシュと同様、自ら交友関係を絶って殻に閉じこもっている人間だったが、元々は愛情深かったウォッシュが忌まわしい体験から絶望的な人間嫌いに陥ったのに対して、彼の場合は本来的な分裂気質者の孤独傾向を窺わせた。患者が来るのを望まないのは、にせ医者であることがばれるからではなく、「性格的な問題」に起因することを彼自身が認めた。彼の左目の瞼は、窓の日除けのように、本人の意志に関係なく、パッとふさがったり開いたりするチック症的な不随意的な瞬きをした。「彼の頭の中に住む別人が、日除けの開閉の紐を弄んでいるような」感じで、何らかの内因性の原因を暗示した。

黙っていた方が尊敬を得られるのに、ジョージに自分の影に包まれた正体をほのめかして、彼の関心を引きたい衝動に駆られて止まない。身の上話を聞かせるのは、抑圧している微かな親愛欲求が対象を求めて気まぐれに噴出するためなのか、マゾヒスティックな自己破滅衝動なのか、のらりくらり、取り留めない話ぶりだ。人間の深層心理には、本人も気付かない抑圧した不安や欲求が隠れていることを知り、複雑怪奇な人間存在の本質を見据えられることこそが、新聞記者のジョージ青年には必要な資質である、と説くのである。事実、ジョージにも、それが「意義深い、現実味に溢れた内容」に聞こえた。

パーシヴァルの父親は、気が狂って精神病院に入院していたことだけが明かされている。どのような精神病なのか、どのような経緯をたどったのかは不明のままにされる。そもそもどんな親子関係だったのかも言及は皆無である。ただ、入院中に病院側の不注意か不手際で死亡したらしく、その時に新聞記者だった彼が遺体を引き取りに行ったとき、病院の連中がおどおどとうろたえ、彼に愛想をするのが滑稽に思えた。父親の死の悲しみと同時に、人間の愚かさと浅ましさを思い知った。父親代わりの兄も孤独で偏屈な変わり者だった。稼いだ給料を家にいれず、これ見よがしに3日間もテーブルの上に金を積み上げ、母親や弟に一文もやらず手も触れさせず、少しずつ持ち出しては酒場に出かけて呑み潰れては使い果たした。自分勝手で偏狭な、横暴極まる利己主義者だった。でも、仕事先に出かけてから、最低限の食料品や生活用品をまとめ買いして、後で送ってよこした。屈折した形でしか愛情表現ができない兄を、母親は弟のパーシヴァルよりも深く愛して、愛情飢餓の恨みを彼に植え付けたようだ。

一時は兄の金を盗んで良心の呵責に苦しんでもいた。牧師になる勉強をしていて、いつもむやみやたらにお祈りばかりしていた。元々は、そういう繊細で神経質な、価値求心的な資質もあったが、それがその後（詳細は不明だが）なんらかの破綻を来し、屈折し、自信喪失の自暴自棄的な人生態度へと向かったらしい。憎しみと愛情の対象だった兄も、酔っぱらって線路上

で寝ていたときに貨車に轢かれて死んだ。父や兄の破滅の人生が、或いは悲劇を招く家系的な遺伝体質が後々のパーシヴァルに深刻な影を落としたようだった。母や弟の自分を大いに軽蔑し、優越感に浸っていた兄が、脆くも簡単に死ぬという人生の皮肉な運命が、いっそう人生への懐疑と不信の念を決定的にしたらしい。人間社会への憎悪が膨らみ、「すべて人間は軽蔑すべき存在」という考えに凝り固まった。孤独癖をいっそう強め、人間関係に絶望した。ある意味で、彼自身も兄（や恐らく父親）と同様に、金のために道を踏み誤り、人生を破滅させたこの時代の人間の典型だった。但し、金に対する屈折した、怨念のような感情を抱いていたためか、診察代の払えぬ貧乏人にはずいぶんと親切だった。

ある日、馬車から落ちた瀕死の少女の救命依頼を、手遅れという理由でにべもなく断わった。医者にあるまじきその冷酷さに町の連中が激昂して、リンチされるという恐怖に、それまで見せたことがないようなパニックに落ちた。無意味な十字架に掛けられるという強迫観念に、異常に怯えた。そもそも彼は、「人間は一人残らずキリストであり、みんな十字架に掛けられる運命にある」というメッセージを本にして著すためにこの町に来たと、自分では説明していた。他よりも優れた人間になるために、ジョージの心を「憎悪と軽蔑」で満たしてやりたいと言ってはばからなかった。彼自身が何かしらの強い罪悪感、あるいは自己嫌悪感に囚われていた。金にまつわるコンプレックスが怨念となって彼の成人後の人生行路を左右し、犯罪行為によって財を成したのかも知れぬ（一切は不明）。しかし、彼の後半の人生が贖罪の意味合いを多分に持つらしいことを考えると、あながち的外れでもなさそうだ。

この物語でも、ある意味で、父親モデルの不在の悲劇要素を見るのは間違いではなかろう。パーシヴァルの父親はおそらく精神病のため父親機能を発揮できなかったであろうし、父親代わりの兄も、父親の分裂気質を受け継いだのか、家族への情愛を持つどころか逆に軽蔑心も露に接したし、家族愛がもし仮にあったとしてもその表現の仕方が屈折していた。或いは役立たずの父親に代わって、ずっと前から経済的な扶養義務が兄の肩にかかっていて、自分が犠牲になっているという被害意識を募らせていたのかも知れない。未熟さ故に自覚が足らなかったと言うよりも、性格的な欠陥性を感じる。父親と兄、それに母親の3人が3人とも、何か性格的問題性をはらんだ家族のようで、家庭崩壊まではいかなくても、少年にはそれに近い、心の安息場や拠り所がない危機状況だったことが予想される。男たちは勝手な行動に走り、金に奔走し、家族を顧みない。それに依怙贔屓（えこひいき）をすることを隠さぬ、致命的欠陥の母親。年少期の心傷体験としては、それだけで彼が後々自己存在を否定し、生きること自体に対する深刻な懐疑を持つに至った説明はつきそうである。放浪者的人生を送ったパーシヴァルの、その正体不明のストレンジャー性はすでに運命付けられていたようだ。

4

上述の3人は、生来的な性格的弱点や欠陥性が原因で、或いは耐え難い人生試練が原因となって、現実世界から逃避し、心を閉ざすようになって、深刻な人間不信に落ちたり、絶望的な厭世気分を患ったりした。彼らは他人を信頼し、他人を愛することができない、不幸でグロテスクな孤独者の一群だった。彼らの孤独状況は、いわば人間関係の絆を自らが絶ち、閉息的な孤絶空間を自らが選んだ結果でもあったとも言えよう。しかし、彼らと同程度に、或いはそれ以上に、精神病質的な歪みを感じさせる性格特徴を持った人でも、社会順応を果たしながら、地域の人間関係の絆の中に根を下ろして、破綻を来さず現実世界に踏み留まることのできる人も

いた。世俗の欲に目が眩んだ訳でもなく、金儲けに奔走する訳でもなかったことが、結局、社会と齟齬を起こさず、人間性を堕落させずに、人間関係を維持していられた理由だった。

A Man of Ideas『着想家』のジョウ・ウェリング（Joe Welling）は、新しい奇抜なアイデアで勝負の決まる時代性を象徴する気質の持ち主である。従って、価値観が地滑り的に激変していた時代の大波に沈没寸前の他の孤独者たちとは違って、まさに狂騒狂乱の時代にふさわしく、逃避・沈黙ではなく、ある意味で積極果敢な攻めの姿勢を取れた人物だった。ジョウの一大特徴は、何よりもその爆発的な興奮性と激しい我執性にあって、始終いろんな思い付きに取り憑かれて、側にいる誰かれにまくしたて、言葉が堰を切ったように次から次へと口からころがり出たのだ。側にいる人は逃れようのない「巨人のような存在感」で、相手を蹂躙し、圧倒しさった。気分変動の激しさ、人前を構わず空想に浸ること、言葉による攻勢をすることなどを考え併せると、多分にてんかん気質者の要素が色濃いと言えよう。「何日も静まり返っていて突然火を吹く小さな火山」のように、時々てんかん発作を繰り返した。

州議会議員をしている父親の口利きで、石油会社の代理人の職を得て、小売店相手に注文取りや集金の仕事をしていた。小柄なジョウは、普段は大人しく無口であり、恐ろしく丁寧な物腰で相手を気遣いながら商売に勤しんだ。しかし、一旦着想を得ると、愛想の良さのどこにその噴火のエネルギーを隠していたのかと思うほどに、見事な豹変ぶりを示した。相手の当惑など考えずに、興奮状態で一方的に、自分が言いたいことを言い尽くすまで喋り続けた。自分の着想の奇抜さやユニークで正確な観察力、状況判断力などに絶対の確信を持つかのような喋り方だった。客観性が完全に脇へ押しやられ、主観意見の独創的な正当性が主張されて止まなかった。静から動へ、寡黙から多弁への落差の激しい変身ぶりだった。

ジョウは母親の死後、新ウィラード館に下宿していたので、ジョージ青年と顔見知りだった。実は、彼は年下の新聞記者（編集助手）のジョージ青年が羨ましくて仕方がなかった。客相手の注文取りの今の仕事は、十分に自分の才能と資質を活かすものではなく、観察力や想像力に溢れ、いつも着想を書き留めるためのメモ帳を持ち歩いている自分こそが、生まれつき新聞記者という知的な仕事に就くべき資格があると考えていた節がある。自分なら「君が気付かないことを見つけ出すよ」と自慢してはばからなかった。命令口調でジョージに「君の手帳に僕の考え付いたことを書け」と言って、「腐朽が常に進行していること」や「世界が燃えている」を書き留めさせた。しかしジョージには彼から被害や迷惑を受けている意識はなく、彼の神秘的な精神構造に強い好奇心を寄せた。

一種の躁状態とも言うべき、幼稚な万能感にも似た高揚気分や自信過剰傾向は、当然のことながら抑制が欠如すればする程、周囲との摩擦と軋轢を生む。誇大妄想的な躁相も、当人が陽気で爽快にしている限りでは歓迎されるだろうが、得てして、些細なことで興奮し、刺激的で怒りっぽくなり、気まぐれな思い付きで行動することが多くなるため、迷惑がられるのが常だ。当人にその自覚がないだけに、余計に始末に悪いことになる。しかし、ジョウの場合は違った。多少迷惑がられることはあっても、観念奔逸から多弁に向かうその過程に、他人の感情を害したり傷つけたりする要素はなかった。人々は圧倒されながらも、静かに嵐が通り過ぎるのを待つ、という趣だった。着想の内容も、人間的な利害には無縁な、一見、害にも薬にもならないように思える、純粋に思索的なものだった。彼の着想は分裂病性の滅裂思考とは明らかに違った。だが、如何に独創性に溢れた奇抜なものであったとしても、それがてんかん発作に似て、首尾一貫性のない、前後の脈絡のない、その場だけの単発花火的なものという致命的な欠陥があったことは予想された。詩的想像力や論理体系の構築に結びつかなかったことが、注文取り

や集金の仕事に甘んじねばいけない所以だったのだろう。

しかし、ジョウの着想の奔逸が目立った反感も招かず、逆に畏敬の念を持って受け入れられたのは、〈てんかん者〉を神にも近い、神秘に満ちた存在とみなす伝統に則っていたからかも知れない。周囲の者の関心を一身に集め、獣のように獰猛な声でいつしか「呪縛」をかけ、思い通りにさせてしまう、言葉を操るカリスマ的魔術師への信仰心に似た畏敬の念だった。さらに、時代の激流に流され、自信喪失の抑鬱状況に沈み、言葉を忘れた孤独者の群像の中にあって、ジョウの己を信じて疑わない素朴な絶対的自信、或いはそれを支える滑稽なほどの楽天性が、言葉に絶対価値をおくアメリカ的風土とも相俟って、ジョウの存在感を巨人の如くにしたのだ。

現実的な意味で、ジョウが人々の尊敬と信頼を勝ち取るきっかけになった2つの出来事があった。先ず、地元の野球クラブのコーチに就任し、その後監督としてチームを引っ張り勝利を重ね、地域社会に貢献する形で無事に地上世界に軟着陸できたことだった。今一つは、彼の初めての恋愛で見事相手の女性を射止めたことだった。この事件では、当初人々は悲劇を予感し、心配と同情と期待の入り交じった気持ちで二人を見守った。と言うのも、彼の意中の女性セアラ・キング（Sarah King）は、傲慢で粗暴だという評判で町の連中から敬遠され恐れられている父と兄と一緒に暮らしていたからだ。青白い顔をした、痩せた、目の下に黒い隈のできた悲しげな女性で、一見して家の中で男たちに酷使されているらしい不幸な女性だった。しかしジョウは、初めて彼女の家族に引き合わされた時に、父親のうなり声の威嚇も耳に入らず、逆に早々に彼らを津波のような言葉で戸惑わせ、煙に巻き、圧倒し、そして笑わせた。彼らに家族の一員として受け入れられたのだ。町の連中はこぞって拍手を送り、祝福した。勇気をもっての一途な猪突猛進ぶり、恥かしいと思わない無感覚さで勝負の行動ができる、愛すべき人間だった。彼には、上述の3人とは決定的に違って、人間を恐れず、困難状況にも立ち向かえる積極姿勢がまだ根底に残っていたのだ。

ジョウのグロテスクさは、いわば健全さの範疇に留まり得るものだった。しかし、特異な性格傾向や奇癖を示しながらも、それらが決定的な破綻の要因とはならずに社会生活に踏み留まる例は、実はジョウだけではない。*Paper Pills*『紙屑玉』のリーフィ医師（Doctor Reefy）は風采には全く無頓着で、年がら年中薄汚れた服を着て、一日中診察室の蜘蛛の巣が張った窓辺で過ごす変人だったが、彼も外界から遮蔽された孤独空間に住んでいた訳ではない。ジョージの母親のエリザベスが人生に疲れた胸の内を喋りに来たときも、じっと耳を傾け、要所でコメントをする精神科医のカウンセリングのような対処を示したし、また、病気のブルーネットの娘を愛情をもって受け入れ、死を看取るために結婚までして、患者にとっては安心して自分を託せる心の治療者の役割を演じた。彼は普段は夢想に耽って、想念を紙片に認めては、それを丸めたボール状にしてポケットに詰め込み、一杯になると捨てる、一見グロテスクで奇妙な常同行為を繰り返したが、それは内と外のバランスを取って心の健全さを保つための精神浄化の意味合いがあった。既述の例で見たように、現実遊離をして空想に浸りきっていると、いつしかそれらが溜まりに溜まって堅固な妄想世界を築く危険性があるのだが、ジョウが爆発的な言葉の奔出で一種のガス抜きをしたように、リーフィ医師の場合も紙屑玉にして捨てるという無意識の排泄行為で心の健全さを維持した。さらに言えば、リーフィ医師のグロテスクな奇癖は、時代に流されず、自身の自由意志のままに孤独を従容として受け入れ、時代の移り変わりを田舎からじっと見据える者の、余裕の心的態度の麗しき標識でもあった。

5

人間性の歪曲を被ったらしいグロテスクな群像が、救いがたい恐怖や絶望を訴えながらも、何か真実の美しいメッセージを携えた使者のように思えるのは事実である。それは、この連作短編集を通して視点を提供している観察者のジョージ・ウィラード青年が、人生に対する希望に胸膨らます、感受性豊かな青年であるからだ。若者を視点に据える理由がまさにそこにある。若さを持った思春期的視点の設定が、グロテスクな群像が投影する人生模様の暗い影を、決定的な否定要素と見なして安易に裁断せずに、自身が大人の世界に参入するに際しての何らかの関わりを持つはずの達成課題として受容するからだ。人生に苦悩する大人たちの素顔を探り、心の暗部を覗き込み、人生の実相を目を凝らして観察しようとする、そんな、謙虚さ、素直さを持っているからだ。

しかし、観察者のジョージは決して無色透明の性格付けをなされている訳ではない。彼自身が、いま厳として生きている苦悩する若者として、多くの魅力と同時に、醜悪さや自己矛盾を内包したリアリティー溢れる存在に仕上げることを作者は忘れなかった。醜い性欲衝動に翻弄されるジョージが見せる利己的な偽善性や横柄さは、勿論、青年期特有の未熟さに起因する部分が大きいから、性欲衝動は誰もがくぐる通過儀礼であるという意味合いでは、確かにほろ苦い共感と哀れさを禁じ得ないグロテスクさである。ジョージ青年以外にも、抑圧していたはずの性欲衝動に突き動かされて自我構造の均衡を失い、知らぬ間に夜間徘徊や窃視症の醜態を晒してしまった大人の登場人物たちが、この連作短編集には数多く登場している。性欲本能こそが人間性の暗部に巣くう情念の最たるもので、この作品集全体を覆う夜の暗い影も、エロス的な親愛欲求やスキンシップ欲求を含めた広い意味での性愛衝動がその正体である。そのグロテスクの暗黒世界に自ら旅立ったジョージの姿を追いながら、自信の過剰と喪失が錯綜する青年期の特徴を3つの作品、*An Awakening*『ある自覚』、*Nobody Knows*『誰も知らない』、及び *The Thinker*『内省的な少年』の中で検証する。性衝動に憑かれた青年が垣間見せる醜悪さを見据える作者の目は確かなものだった。

『ある自覚』では、ベル・カーペンター（Belle Carpener）をめぐってジョージが争う相手が、背が高くて肩幅の広い、いわば無骨者のエド・ハンドビィ（Ed Handby）という30男である。彼は喧嘩っぱやくて、時に野獣のように暴れ回り手当たり次第に物を壊す粗暴さである。25才の時に伯父から遺産相続をしたが、大金を底抜けの放蕩に使い果たしもした。しかし、無類の乱暴者だが、無論、ジョージにはない男性的な野生味や肉感性もあって、意外と一途で情熱的な一面も持っていた。女性にも猪突猛進の強引さを見せ、ベル・カーペンターを自分の求める女だと決めると、その意志を表明して彼女に一方的に求愛した。話し下手な彼は「余りにも単純な性質だったので、いざ話そうとすると自分の意図がうまく説明できなかった。」　言葉の代わりに、自分の肉体で気持ちを表明して、彼女を両腕に抱きしめてぐったりとなるまで接吻した。

この短編の中では、一方のジョージ青年は、エドとは対照的に、行動的な男の逞しさはないが、巧みな言葉の使い手であることが強調されている。言葉数の多さは、言うまでもなく行動力が伴わない彼の優柔不断さを逆証明していた。玉突場では、仲間の関心を自分に引き付けようと喋りまくり、女とデート中に起きるどんな事にも男は責任がないなどと、一端の経験者を装って独演をする。暗い帰り道でも、辺りに人影もなかったので、高揚気分の独り言を始める。「自分の言葉に催眠術をかけられた」ように、一度も考えたことがなかったアイデアが浮かん

できて、我ながら自分の頭の良さに感嘆もした。自分が現実世界から遊離した「言いようもない程に大きな存在」になり、「意味に満ちた素晴らしい言葉」を吐いている錯覚に陥った。ベルをうまくデートに誘い出した時も、力に満ちた感じがまだ残っていたので、大胆な口のきき方をし、偉そうな言葉をはき散らした。真の男らしさが欠如しているという自覚が以前からあったので、いっそう背伸びをして強がった。

いよいよ彼女が身を任せるつもりらしいと確信して自信を深め、心臓の鼓動が高まったが、彼女が自分の言葉を注意して聞いていなかったのでいらいらした。彼女を腕に抱きながら「肉欲、肉欲と夜と女」と囁いた。だが、性欲衝動に酔いしれて彼女を我が物にしたと思った瞬間、屈辱の敗北が彼を待っていた。突然姿を現したエド（後をつけてきたらしい）に問題にされず何度も子ども同然に突き飛ばされて、怒りと憎しみで半狂乱になった。結局、恐れていた通り、女にうまく利用され、二人の縁結びのピエロ役をやらされただけだった。ベルがエドに嫉妬させ、苦しめるために、うまく自分が利用されたのだ。一人前の男にはなれなかった耐え難い無念さに身を焦がした。肉欲に憑かれ衝動に身を任せたが、それは男らしさを証明する行為ではなく、逆に、彼の言い訳がましくて優柔不断な、言葉だけで上滑りをしてしまう弱点を曝け出す結果となった。

『誰も知らない』の中のジョージ青年は、肉欲に取り憑かれて〈性〉の未知なる世界に入ろうとする過程で、男の自分勝手で醜い利己的な姿をより鮮明な形で露呈している。辺りを窺いながら暗がりを縫うように、通行人を避け、街灯の明かりに顔を隠して〈冒険〉に出かける。ルーイーズ・トラニアン（Louise Trunnion）からの誘惑に乗って、〈性〉の未知なる世界に乗り出した。今夜こそ本望が遂げられそうな予感に、性欲衝動にわが身を委ねて行動することへの後ろめたさと羞恥心が一気に募った。同時に、せっかく踏み出した冒険の途中で、勇気がなくなって引き返すことになりはしないかという、自分の優柔不断さへの懸念もあった。彼女と歩きながら、落ち着きのない声で笑い出した。手で触りたいのに触る勇気のない自分に歯がゆさも感じた。最初は内心の不安と動揺を隠せなかったが、彼女が後腐れのない尻軽の女だという噂話を思い出した。彼女がすっかりその気でいることに気を強くして、大胆で攻撃的な男に変身し、口から言葉が「洪水のように」溢れ出て、彼女を誘った。打算的で、無責任で、自分のことしか考えないジョージは、性行為に焦る若者のグロテスクな未熟さを見事に明示するのだ。「さあ、行こう、いいじゃないか。誰にも何にも分からないさ。知れるはずがないじゃないか。」　暗闇に身を潜める彼は、性欲の虜となって、相手の女性に対する愛情などは更々なく、単なる欲望処理の対象としての好都合の女としか見ない醜さを露呈してしまった。

軽薄な言葉が先行しがちなジョージの醜悪さをそばでじっと観察し批判の目を向けるのが、*The Thinker*『内省的な少年』のセス・リッチモンド（Seth Richmond）だった。ジョージの一歳年下の友人である彼は、ジョージを含めてこの町の連中は、始終下らないことばかり喋っているという反感と怒りを持っていて、彼らのたわいない軽口にひどく神経を苛立たせるのだ。「下らないことを喚き立て、自分の言葉に酔いしれる連中」ばかりだという軽蔑感が、彼を深刻な疎外感に沈ませた。「孤独は彼の性格の一要素だった。」しかし、同時に、活気のある笑いの中に入れない自分を後悔し、周囲の事柄に関心や興味を持てない、興奮して何かに熱中できない自分にもどかしさを感じてもいた。

セスも母親との二人暮らし。誰からも愛され尊敬もされ、温厚で且つ情熱を秘めた、感受性に富んだ子供っぽい男だった父親は、無意味な決闘で死亡していた。投資や投機に失敗して、財産を食いつぶしてしまった実業家で、いわば時流に乗り損ねた落伍者だったが、性格的にも

内なる弱さを秘めた破滅型のタイプだった。今でも亡き夫を愛していた、気弱で優しい古風な母親は、18歳になった無口で頭脳明晰な息子を異常に尊敬しつつも大いに戸惑い、父親同様、非業の死を遂げるのではないかと心配していた。町の連中も彼の沈黙に一目を置いてはいたが、今に突飛なことをしでかすに違いない「底知れない男」の噂がもっぱらだった。彼は自分の生まれた町の生活に「溶け込んではいないし、属してもいない」という疎外感に大いに苦しみ、「追放者」である自分を意識せざるを得なかった。「誰も彼も喋ってばかりいる。僕はお喋りにはもう飽き飽きしたんだ。お喋りとは無関係な仕事に就きたい」と、都会に出て働く意志を固めたのである。セスの存在は、下らないお喋りばかりしていたジョージとは対照的で、自分の人生（仕事や将来設計）を真剣に考えるとき、青年は黙り込むものであることを身を持って示した。人生の決断は一人孤独の中でするものであって、青年が無駄なお喋りを放棄する時が自立の第一歩だった。そして、孤独にもがくセスの場合もそうだが、父親モデルの不在の問題が、狂騒・狂乱の時代にあっては、当たり前の前提として青年に課せられた。大人の男たちが如何に生きるかという人生の指針を呈示できないこの時代、セスもジョージも自立を逡巡しながらも、やがては苦悩に満ちた船出をせねばならなかった。

6

『オハイオ州ワインズバーグ』だけではなく、アンダソンの文学世界全体を読み解く鍵概念の代表が〈グロテスク〉であると言ってもよいぐらい、この言葉はアンダソンとは切っても切れない本質的な関係があるようだ。この作品の冒頭に掲げられた *The Book of the Grotesque*『グロテスクなるものについての書』は、作者自身とおぼしき老作家がグロテスクなる群像を描きたいという自らの創作の意図を語る、いわばプロローグとしての導入的意味合いを持っているので、残りの24篇は総じて「グロテスクなるものについての症例研究」The Novels of the Grotesque であると言って言えなくもない。しかし、このグロテスクという言葉はなかなか定義が難しい。そもそも〈グロテスクなるもの〉自体が、定義を拒絶する、枠にはめられることを嫌う、曖昧で、漠然として、どろどろとしていて、摑みどころのない、そんなものを指して言うのかも知れない。ともかく、『グロテスクなるものについての書』の中で作者が定義らしきものを試みている有名な箇所がある。

> ・・・ in the beginning when the world was young there were a great many thoughts but no such thing as a truth. Man made the truths himself and each truth was a composite of a great many vague thoughts. All about in the world were the truths and they were all beautiful.・・・・ It was the truths that made the people grotesques. The old man had quite an elaborate theory concerning the matter. It was his notion that the moment one of the people took one of the truths to himself, called it his truth, and tried to live his life by it, he became a grotesque and the truth he embraced became a falsehood. (pp. 23-4)

人間は現実生活とは別に、頭の中で様々な「想念」を楽しんだ。最初は断片的な思い付き程度だった「想念」が、次第に複雑多岐にわたり、高度な内容のものとなって、やがて有機的な繋がりとまとまりを持つ観念の世界になった。物事の本質を言い当てる、一つの完結した意味

内容の「真理」が現出するに至った。人間の「想念」が作り出した「真理」は、現実の世俗的価値や人間的利害とは無縁の、純粋に観念的な自由なものだったので、最初はどれも美しい輝きと魅力を持つものだった。だが、人間がその自由で伸びやかなはずの「真理」を我が物として過剰に執着し、それを「自分の真理」と呼んで独占し、その「真理」のみに従って自分の生涯を送り始めようとした途端、その人間は「グロテスク」な姿に変貌したのだ。現実の人間関係を絶ち、外的世界との生命交歓を断念して、観念の世界に埋没し過ぎると、いつしか孤独な人間は我執に憑かれてしまう。己の勝手な理屈を拠り所にして世を拗ね、奇怪で偏屈な人間に変貌せざるを得なくなるのだ。

作者アンダソンは、現実の社会や人間関係を捨て、自分一人の孤独空間に身を沈めるに至る要因が実に多様であることを、幾多の症例研究で実証した。父親モデルの欠落を強いる時代性にその大きな原因を求めることもできるし、親子関係を含めた家庭因や気質的な遺伝要素も考えねばならない。性格的脆弱さが現実試練を拒絶して、回避に走る場合もある。それにしても、喋ることが苦手で、うまく自己表現が出来ない者の何と多いことか。異常に喋り続けるグロテスクさもあるが、喋ることを拒絶して孤独に堕ちる人間の多さに驚かされる。彼らは一様に、人前で口ごもり、葛藤の後に無口に陥り、次第に心を閉ざすようになる。現実世界からの逃避傾向を一気に強めて、孤独の淵に転落する。彼らが喋れないという事実は、即、人間関係のネットワークからの脱落、窒息するような閉塞状況への墜落を意味する。健全な精神状態の維持は、己の心を開いて外界世界（人間関係も含めて）を受容する、ある意味での外との生命交歓が是非に必要であるのだが、心を閉ざす彼らの場合は、外気の生命エネルギーの補給路を断たれ、すでに病的なまでのグロテスクな歪みを被っていると言えよう。あらゆる精神病が、概ね人間状況からの離反や疎外に起因することを、今更ながら思い知らされるのだ。

新しい時代精神（効率重視の合理精神や、拝金主義、出世第一主義、物質的享楽主義など）は、多くの不適応者たち、脱落者たちを生む。新旧の文化の狭間にあって、こわばり立ちすくむ者、戸惑うばかりの者、消化不良の憔悴症状を見せる者、現実を拒絶して空想世界へと逃げ込む者、と様々だった。中には、文化衝撃（culture shock）の深手をまともに負って、不安神経症的な抑鬱状態、あるいは、精神病的な分裂状態を呈する者まで出て来る。それに、登場人物の多くが、多少とも、生き生きとした生命感情の低下や萎縮、身体的なこわばりや緊張をどうも訴えている。時代の大きな転換期には、得てして、柔軟性のない、小回りの利かない、素朴で純真な人ほど、文化衝撃の痛手をもろに受けてしまうのも事実のようである。それに、たとえその代償として下積みの孤独の生活を強いられようとも、資本主義産業社会の巨大な機構の中に組み込まれることを拒絶する人々の方が、人間性を失墜し、人間味を剝奪された人々よりもましということも言えそうである。彼らは、誇張や歪曲をされて戯画化されたグロテスクな姿を晒してはいるが、牧歌的な、いわばエデン的な調和世界から強制排除を受けた、悲しい哀れな存在だった。

注

1．使用したテキストは *Winesburg, Ohio* (Penguin Books 1992年度版)。テキスト中の語句を引用する場合は括弧を付けたが、引用ページは省略した。

2．拙稿『虐げられた女性たち —— *Winesburg, Ohio* の世界 ——』名古屋女子大学紀要第43号（人文・社会編）1997年　pp. 273-86.